



期日：2016年12月4日（日）13:00~15:30・参加無料

会場：タイムスホール（那覇市）＊ご来場は公共交通機関をご利用下さい。

開催趣旨：南西諸島のサンゴ礁では、比較的調査研究と保全活動の活発な慶良間列島・先島諸島と比較して、国立公園指定を控えた奄美群島・大隅諸島・トカラ列島および沖縄諸島北部の情報は充分とは言えず保全活動の規模も小さい。気候変動下における亜熱帯から温帯への漸進帯としてこれらの地域の情報は重要で、保全活動の活性化も急がれる。本シンポジウムは、このような南北格差を解消し南西諸島全体の理解を深めることを期して企画した。

プログラム

趣旨説明

13:00-13:10 中野義勝（琉球大学熱帯生物圏研究センター・サンゴ礁保全委員会）

講演

13:10-13:30 山野博哉（国立環境研究所）「サンゴから見た与論～種子島の重要性」

13:30-13:50 山崎敦子（北海道大学喜界島サンゴ礁科学研究所）「喜界島周辺海域のサンゴ礁生態系の時空間分布：喜界島サンゴ礁科学研究所を拠点にしたサンゴ礁研究と環境教育の新たな試み」

13:50-14:05 藤井琢磨（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）「奄美大島の生物多様性研究の現状」

14:05-14:20 興 克樹（奄美海洋生物研究会）「奄美大島のサンゴ礁保全の現状と課題」

14:20-14:40 中井達郎（国士舘大学）「沖縄島以北におけるサンゴ礁保全の問題点」

パネルディスカッション

14:55- 15:30

パネラー：山野博哉・藤井琢磨・興 克樹・中井達郎

総合司会：中野義勝

主催：日本サンゴ礁学会第19回大会実行委員会

共催：日本サンゴ礁学会サンゴ礁保全委員会

後援（アイウエオ順）：沖縄県・沖縄県サンゴ礁保全推進協議会・沖縄タイムス社・

鹿児島県・環境省・南海日日新聞社・日本学術会議・琉球新報社・NHK 沖縄放送局



講演要旨

山野博哉：生物多様性条約では EBSA（生態学的、生物学的に重要な海域）の基準が示され、EBSA が海洋保護区設定の基礎資料になることが期待されている。本講演では、サンゴを対象として EBSA の 7 基準（希少性と独自性、生活史における重要度、絶滅危惧種とその生息環境、脆弱性と回復力、生物生産、生物多様性、自然性）に基づいて全国規模の解析を行った結果を示し、サンゴの保全から見た北琉球の重要性を明らかにする。

山崎敦子：奄美群島の東端に位置する喜界島は類稀なる隆起速度によって、過去 10 万年間の離水サンゴ礁および現在の造礁サンゴ群集を観察できる。喜界島は亜熱帯から温帯の境目に位置し、過去の気候変動によりサンゴ礁の形成速度とサンゴ群集組成が変化してきたと考えられ、サンゴ礁科学に新たな知見をもたらすことが期待される。本講演では、2015 年に新たに設置した喜界島サンゴ礁科学研究所での研究の展望とこれまで行ってきた環境教育活動について紹介する。

藤井琢磨：奄美大島周辺海域は、魚類や藻類では分布の北限と南限の混在が知られる等、生物地理学上重要な位置づけにある。しかし、当海域においては、有藻性サンゴ類を含め、多くの海洋生物における種多様性は明らかにされていない。鹿児島大学は平成 27 年度、県内島嶼部における生物多様性解明のため奄美大島に分室を設置した。当分室設置以後、演者らが行ってきた調査例を交え、奄美大島の海洋生物多様性研究を取り巻く現状について紹介する。

興 克樹：奄美群島では、1973 年～2003 年に奄美群島国定公園海中公園地区での奄美群島海中資源保護協議会によるオニヒトデ駆除が実施された。2004 年からは奄美群島サンゴ礁保全対策協議会によるサンゴ保全海域（約 30 海域）でのオニヒトデ駆除および全域でのモニタリング（約 100 地点）が毎年実施されている。群島全体でオニヒトデや白化等の発生状況を共有し、各市町村で柔軟に保全海域を設定し、守るべきサンゴ群集保全への取り組みが始まっている。

中井達郎：近年、研究者や保全関係者の奄美群島におけるサンゴ礁への関心が高まりつつある。しかし、その一方で、一般の人々の関心は広がっているとはいえない。登録にむけた準備が進められている「奄美・琉球」世界自然遺産においても、海域は対象外である。分布北限域である奄美群島以北のサンゴ礁について、今一度、その存在に対する理解を深め、その価値を認識・共有することが必要な時期を迎えていると考える。それは、島嶼の陸域と海域を一体にとられた統合的な自然環境保全につながる。さらに沖縄本島を含めて奄美群島以北のサンゴ礁を認識することは、琉球列島全体の自然環境保全を考える上で不可欠な視点である。